

# 《通円》をめぐる

関西大学教授

関屋 俊彦

宇治橋のたもとが見えてくる通円茶屋の軒には上品な老人が茶の風呂釜を据えて、床机に立ち寄る旅人に風流をひさいいでいた……。お通は茶を味わいながら

吉川英治「宮本武蔵」

昨平成十五年NHKの大河ドラマ「武蔵」が放映されたためであるが、久しぶりに通円茶屋を訪れたら平日にもかかわらず訪れる客は引きも切らずであった。

大藏虎明(二六六二年没)の台本であらずしを追ってみる。出家が登場し、静かに語る。彼は北国方の出家で、都を訪れたあと奈良に向かう途中、宇治の里に着いたと名乗る。見ると、茶屋ではいわくありげに茶湯を手向けている。茶湯は「ちやとう」と発音し、禪宗で仏前に供える茶を煎じ出した湯を指す。問えば、昔、宇治橋供養の折、通円の立てる茶を所望する者が大勢押し掛け、ついに通円は点て死にしたと語る。丁度この日が命日なので弔ってもらえないかと言われる。そこで、出家が弔っていると、通円頭巾・通円という専有の頭巾・面をつけ、団扇を持った通円の亡霊が現われる。そして、最期のありさまを舞い謡い、回向を頼みながら消えていく。

まさに夢幻能仕立てである。かつ三百人を相手にする通円の奮闘ぶりは明らかに能《頼政》の中ノリ地のもじり(パロディー)である。通円の面を大藏虎明は『わらんべ草』の中で「頼政の崩し」としている。このように能を前提にした狂言は結構ある。《翁》における《三番叟》が代表的な例であろう。従って順序で言えば、能《頼政》を見た後で狂言《通円》を見るのが良いのであろう。能をもとにした狂言は舞を主としてそれだけ位は重くなる。「楽阿弥・祐善・蛸野老・双六・蟬」と共に《通円》は「舞狂言」と呼ばれている。

更に大藏虎明の台本に次のような書き込みがある。

通円が「二休作」服「銭」期内 最期「念温客泡」通円辞世「行く先も又行く先も傀儡の」これまでにて終わりけるを二休後の句を御継ぎ候。「糸切れぬればもとの木のきれ」

通円辞世の歌の下句を「休宗純(三九四)四八」が付けたというのである。「あに」は「句に」でもあろうが「休と義兄弟であったとの理解もあつたと解し得る。

通円茶屋の伝承では、通円の元祖は源頼政の家臣古川右内で、平等院に「太敬庵通円」の墓碑名で建立されている。頼政の墓もすぐ近くである。「休と親しかったのは七代で、康正元年(四五五)没という。店内には休作通円木像なるものも安置されている。残念ながら当時の宇治橋供養の記録は見出していない。

伝承はまだ時間をかけて調べることとして、『天正狂言本』(五七八年)に「とうえん」とあるのが《通円》ではないかと推測されている。天正のころと言えば茶湯の盛況である。豊臣秀吉は宇治橋から水を汲ませて茶を点てたと伝える。通円茶屋に限らず平等院に至る商店街には茶屋が立ち並ぶ。茶にまつわる狂言《茶壺》なども成立し、小歌「宇治の晒」も歌われた。お茶道中を歌った「ずいずいずつろばし」の童謡まで出来た。「茶道辞典」では「通円」とは「土産に売られていた茶器」である。次に考えたいのは宇治猿楽の存在である。平等院を中心とした離宮祭には少なくとも鎌倉時代には成立していた宇治猿楽の座が奉納していた。それが解体され大和猿楽に所属されてしまったのは、まさに秀吉の時である。《通円》は宇治猿楽の繁栄の名残りであったのかもしれない。

\*のち「狂言《通円》をめぐる」付、翻刻「通円家文書」(『説話論集』第十五集、2006年1月14日・清文堂)に発展